

氏名	スチンバト 斯欽巴図
授与学位	博士(学術)
学位記番号	学術(環)博第121号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位授与の根拠法規	学位規則第4条第1項
研究科, 専攻の名称	東北大学大学院環境科学研究科(博士課程) 環境科学専攻
学位論文題目	『三合語録』のモンゴル語の研究
指導教員	東北大学教授 栗林 均
論文審査委員	主査 東北大学教授 栗林 均 東北大学教授 岡 洋樹 東北大学准教授 上野 稔弘

論文内容要旨

本論文では、従来のモンゴル語の研究・論考において19世紀前半のモンゴル語の口語の資料として取り上げられてきたモンゴル語の会話学習書『三合語録』のモンゴル語の口語の実態(言語学的特徴)は、オイラート・モンゴル語に基づくオイラート文語の満洲文字表記であることを明らかにし、それを近代モンゴル語におけるオイラート文語やオイラート方言の貴重な資料として位置づけた。

本論文は、序論・本論・結論の三つの部分からなっており、本論は

第1章 『tangg@ meyen(一百条)』のモンゴル語訳のテキスト間の対照

第2章 『三合語録』のモンゴル語の音韻的特徴

第3章 『三合語録』のモンゴル語の文法的特徴

第4章 『三合語録』のモンゴル語の語彙的特徴

第5章 『三合語録』のモンゴル語の文献学的考察

という5章から構成されている。その他、『三合語録』の102話(条)、305丁(610頁)の全文の満洲語とモンゴル語にローマ字転写を施した『三合語録』の満洲語とモンゴル語のローマ字転写および漢語の対照テキスト(付録1)と、そのモンゴル語のローマ字転写に基づいて作成した『三合語録』のモンゴル語の全単語索引および名詞・動詞語尾索引(付録2)の付録2部を付した。

序論では、研究の対象、本研究の目的と意義、関連文献、先行研究、問題点と研究方法について記述した。

近代モンゴル語（16～20世紀）においてモンゴル文語（モンゴル文字による書き言葉）の文献資料が数多く残されている。モンゴル文字には一つの文字が二つ以上の読み方をもつ多音字が存在すると共に、それによって書かれたモンゴル文語の正書法がすでに確立していたため、モンゴル文語の文献資料から当時の口語の状態を知ることは困難である。こうした状況の中で、道光九（1829）年の「序」をもつ『三合語録』のモンゴル語は、モンゴル文字でなく満洲文字で表記されていると共に、19世紀前半のモンゴル語の口語を表していることに大きな特色がある。しかし、『三合語録』のモンゴル語について、Nagy [1960] では東部モンゴル方言である可能性を示したに過ぎず、その口語の実態と、現代のモンゴル語の諸方言との関係はほとんど明かにされていなかった。本論文では、『三合語録』のモンゴル語を対象として、それに関連するテキスト間の比較、言語学的検討、文献学的考察といった三つの角度から論述した。

本論の第1章では、『三合語録』のモンゴル語（最初の7話）と、その成立に深く関わっている「トド文字一百条」のオイラート文語と『初学指南』の満洲文字表記モンゴル語、また、これらと同じく『tangg@ meyen（一百条）』の満洲語を底本とした『蒙古翻訳一百条』のモンゴル語訳との関係を問題として取りあげた。ここで、それらの語句と語尾の対応によって、『三合語録』と『初学指南』のモンゴル語は、それぞれ「トド文字一百条」のオイラート文語に基づいて制作された「系譜関係」にあるが、『蒙古翻訳一百条』のモンゴル語は独自に行われたモンゴル文語訳であることを示した。

『三合語録』のモンゴル語と「トド文字一百条」の使用されている語句、文法的語尾の表記はほとんど合致しており、『三合語録』のモンゴル語における衍字、また誤記は、「トド文字一百条」のオイラート文語を満洲文字で表記する際に生じたものと考えられる。一方、『三合語録』のモンゴル語と比べて、『初学指南』のモンゴル語の語句の増減や異同、そして句読点の有無は、ほとんど「トド文字一百条」と対応し、『初学指南』のモンゴル語における誤記も、「トド文字一百条」のオイラート文語に基づいて制作される際に生じたものと考えられる。三つのテキストの「系譜関係」の実態は、『三合語録』では、「トド文字一百条」のオイラート文語を忠実に満洲文字で表記しているが、『初学指南』では、オイラート文語に特徴的な語尾や、オイラート方言の語彙が非オイラートの書き換えられている。

これらに対して、『蒙古翻訳一百条』のモンゴル語の語尾・語彙・表現が「トド文字一百条」や、『三合語録』と『初学指南』のモンゴル語と著しく異なり、他のテキストとの「系譜関係」が認められない。

第2章では、『三合語録』のモンゴル語の満洲文字表記はモンゴル語の音を忠実に表しているか、その音韻体系は何かを中心に検討した。ここで、「トド文字一百条」のオイラート文語と『三合語録』のモンゴル語の「系譜関係」を手がかりとし、それらのトド文字と満洲文字表記の対応から、『三合語録』のモンゴル語の満洲文字表記は、満洲文字の綴りの規則や文字の種類に制

限されるものの、基本的にオイラート文語の正書法にしたがってその音韻体系を表していることを明らかにした。

「トド文字一百条」と『三合語録』のモンゴル語におけるトド文字と満洲文字の対応は、基本的に規則的である。例えば、トド文字の母音字<a>,<e>,<i>,<o>,<u>にそれぞれ満洲文字の<a>,<e>,<i>,<o>,<u>が対応すると共に、こうした対応は、トド文字の長母音や二重母音の表記にもほとんど適用されている。また、『三合語録』のモンゴル語では、満洲文字で表記されない音や音の区別が存在するものの、それは満洲文字の種類（数）や表記方法、正書法の制限によって表面に現れていないと考えられる。例えば、トド文字の表記には<a>と<A>、<e>と<F>など短母音と長母音の対立があるが、満洲文字表記では<a>、<e>など同じ母音字が対応しているのは、満洲文字の綴りでは単独で長母音を表す文字がないからである。

オイラート文語の音韻体系を表していることを裏付けるのは、『三合語録』のモンゴル語にあるオイラート文語の正書法に立たなければ、解釈できない表記である。例えば、toKQldu=qsan+i「会ったものを」>tokuldu=ksar(6a3)、doku(246b1)「合図」のみにみる男性語における満洲文字の<ku>は、いずれもオイラート文語の特徴的な表記<KQ>によって解釈しうるものである。

第3章では、『三合語録』のモンゴル語の文法的特徴として、名詞の格語尾と動詞の活用語尾を網羅的に調査し、それらの全体的な特徴はオイラート文語の語尾と一致していることを判明した。

『三合語録』の最初の7話のモンゴル語の語尾は、「トド文字一百条」の語尾とほとんど合致しており、オイラート文語に特徴的な語尾とみなすことができる。それらは、『三合語録』の基本的な語尾の形であり、全体に渡って一貫している。例えば、属格語尾+iyen/+i_yen、現在・未来形時制語尾=nai/=nei、仮定の副動詞語尾=h@na/=kune、譲歩の副動詞語尾=baCigi/=beCigi、目的の副動詞語尾=xai、=xA、=kFなど。

『三合語録』の第8話以降に現れる語尾の表記もオイラート文語に特徴的なものが多い。例えば、子音字 ng で終わる語幹に付く奪格語尾+gasu、連合格語尾+la、+lai、過去形時制語尾+lai*、分離の副動詞語尾=it など。これらは、H6 Luvsanbaldan [1975]、《蒙文和托忒蒙文》[1976]、加・倫图 [2003]、サンボードルジ・橋本勝 [2005] などのオイラート文語の文典によって確認できる。

第4章では、『三合語録』のモンゴル語における語形と意味がモンゴル文語と異なる語彙を取りあげ、それらの方言の特徴、また『初学指南』のモンゴル語との対応を検討した。ここで、こうした語彙はいずれもカルムイク・オイラート語に特徴的であることを明らかにし、それらに対して『初学指南』のモンゴル語では非オイラート方言の語彙が対応している事実を示した。

本章で取り上げた50語、例えば、mur bol=Ji「幸いにも」/ashon「晩」/@run「朝」など

語形がモンゴル文語にない語彙、Cuk「すべて」/adak+tan「結局」/sineken「たった今」など語形がモンゴル文語にあるものの意味が異なる語彙、hama「どこ」/yaga=Ji「どうして」/kumu「人」など語形の一部がモンゴル文語と異なる語彙は、すべてカルムイク・オイラート語に特徴的な語彙であり、烏恩奇、齊・艾仁才[2005]、Ramstedt[1935]、Krueger[1978-1984]、Toda.va[2001]などカルムイク・オイラート語の辞典類に確認することができる。

これらのうち、26語に対して、『初学指南』のモンゴル語では非オイラートの語彙が対応している。『三合語録』と『初学指南』のモンゴル語がそれぞれ「トド文字一百条」に基づいて製作されたという見地から、『三合語録』ではオイラート語の語彙を忠実に表記しているに対して、『初学指南』ではそれらを非オイラートの書き換えているとみなすことができる。

第5章では、『三合語録』の満洲語とモンゴル語の異同と「序」におけるモンゴル語に関する記述について文献学的考察を行い、『三合語録』のモンゴル語は、「トド文字一百条」のオイラート文語に基づきながら、『三合語録』の満洲語の異なる内容を取り入れた成立の過程を論じた。

『三合語録』の満洲語とモンゴル語の対応において、モンゴル語にあるが満洲語にない字句と、満洲語と異なるモンゴル語の字句の多くは『清字一百条』（『tangg@ meyen（一百条）』の通行本）や『清文指要』（『tangg@ meyen（一百条）』の満洲語とその漢語訳）の満洲語と対応している。しかも、『三合語録』の満洲語にあるがモンゴル語にない字句の一部は『清字一百条』や『清文指要』にもない。特に、『三合語録』のモンゴル語における衍字は、先にあった訳文に『三合語録』の満洲語の直訳を付け加えたとみなされる。

これに関連して、「序」におけるモンゴル語に関する記述から、「最初に『tangg@ meyen（一百条）』の満洲語をモンゴル口語に合わせて翻訳した」ものは「トド文字一百条」であり、次にそれを「モンゴル方言に直させた」ものは『初学指南』である。そして、「以前に書いた満洲・モンゴル語の書」のモンゴル語は『三合語録』のモンゴル語であるが、その前にオイラート文語を満洲文字で表記する段階があったと推定される。

結論では、各章の要点をまとめ、『三合語録』のモンゴル語の「口語」の実態は、オイラート方言に基づくオイラート文語の満洲文字表記であり、それを近代モンゴル語におけるオイラート文語やオイラート方言の貴重な資料と見なすべきことを主張した。また、トド文字と満洲文字の対応から、満洲文字、そして従来満洲文字表記モンゴル語の音韻的特徴をより明らかにすることができる可能性を示した。一方、今後の課題として、『三合語録』のモンゴル語の書かれた動機や、『三合語録』の編纂された経緯を明らかにするには、当時の歴史情勢を背景にして検討する必要性、また『三合語録』と『初学指南』のモンゴル語の全体に渡る比較研究を行う必要性を提示した。

論文審査結果の要旨

本論文は、19世紀前半の中国清朝のもとで出版されたモンゴル語の口語学習書『三合語録』を研究対象として、資料の文献学的な研究を行うとともに、そこに記録されているモンゴル語を言語学的に分析・研究したものである。

『三合語録』は、モンゴル語・満洲語・漢語の三言語対訳の形をとっており、そのモンゴル語は当時モンゴル族が書き言葉に使用していたモンゴル文語（モンゴル文字）ではなく、満洲文字でモンゴル語の口語を表記しているところに大きな特徴がある。木版本で、全体で610頁、102話の対話が収録されている。

本論文は、『三合語録』における大量な口語資料の言語的な特徴を解明しようとしたもので、序論・本論（全5章）・結論と、付録1（『三合語録』全テキストのローマ字転写、翻刻）、付録2（『三合語録』モンゴル語の全単語・語尾索引）によって構成されている。

本論の第1章では、『三合語録』と深く関連する、『tanggū meyen（一百条）』、『初学指南』、『トド文字一百条』（『蒙古托忒彙集』収録）、『蒙古翻訳一百条』を取り上げて、相互の関係を論じ、『三合語録』が「トド文字一百条」に基づいて制作されたことを論じた。第2章では『三合語録』のモンゴル語の音韻的な特徴、第3章ではその文法的特徴、第4章では語彙的な特徴が具体的に論じられ、第5章で『三合語録』の文献学的な考察が行われている。

本論文は、これまで学界で存在すら知られていなかったオイラート文語で書かれた「トド文字一百条」を「発見」して、『三合語録』のモンゴル語がこのオイラート文語を満洲文字で表記しようとしたものであることを、文字の対応・文法的語尾の対応・語彙・語順の対応から緻密に論証したことにより、これまで不明とされていた『三合語録』のモンゴル語口語がオイラート文語・オイラート方言であることを解明したもので、モンゴル語学・モンゴル語史・モンゴル語文献学の分野における学術上の意義は極めて大きく、学問的に高く評価される。この新しい知見は、清朝において『三合語録』が成立し、利用された社会的・歴史的な背景を解明するさらなる研究へと発展していく可能性を提示するものである。

本論文の著者は、モンゴル語、満洲語、オイラート文語、白話体漢文といった多種の言語を含む文献を正確に読解し、確かな基礎の上に文献学的・言語学的な分析を行っている。同時に、分析の手法は緻密で、言語学・音声学の知識と方法に裏付けられており、博士論文として高い質を有している。

以上のことは、本論文の著者が当該研究分野において自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。

よって、本論文は博士(学術)の学位論文として合格と認める。